栃木のいちご栽培の歴史

日本一の産地となるまでの道のり

いちごの始まり

栃木県では、戦後の昭和20年代に麦類の統制廃止や麻価格の下落などを背景にいちごが導入されました。昭和27年に、宇都宮市姿川地区と御厨町（現足利市）で集団栽培されたのが産地の始まりと言われています。

昭和30年代、収益性が高く水稲の裏作として栽培できるいちごは、急速に栽培が広がりました。

露地栽培
足利市

石垣栽培
鹿沼市 昭和30年代

トンネル栽培
御厨町（現足利市） 昭和37年

箱詰め状況
西方村（現栃木市西方町） 昭和38年

早出しへの挑戦

昭和40年代前半には「株冷蔵」や「高冷地育苗」などの低温処理による休眠打破技術が開発され、それまで5～6月に出荷されていたいちごが、2月に出荷出来るようになりました。

株冷蔵の入庫状況
昭和43年

高冷地の山上げ風景
戦場ヶ原（日光市）

『女峰』誕生

昭和60年に栃木県が開発した「女峰」が誕生し、育苗技術の開発とあわせクリスマス時期の出荷がついに実現しました。

昭和62年に夜冷育苗施設の導入が始まると、出荷開始時期は11月上旬にまで早まり、いちごの収益性は飛躍的な向上を遂げました。

女峰

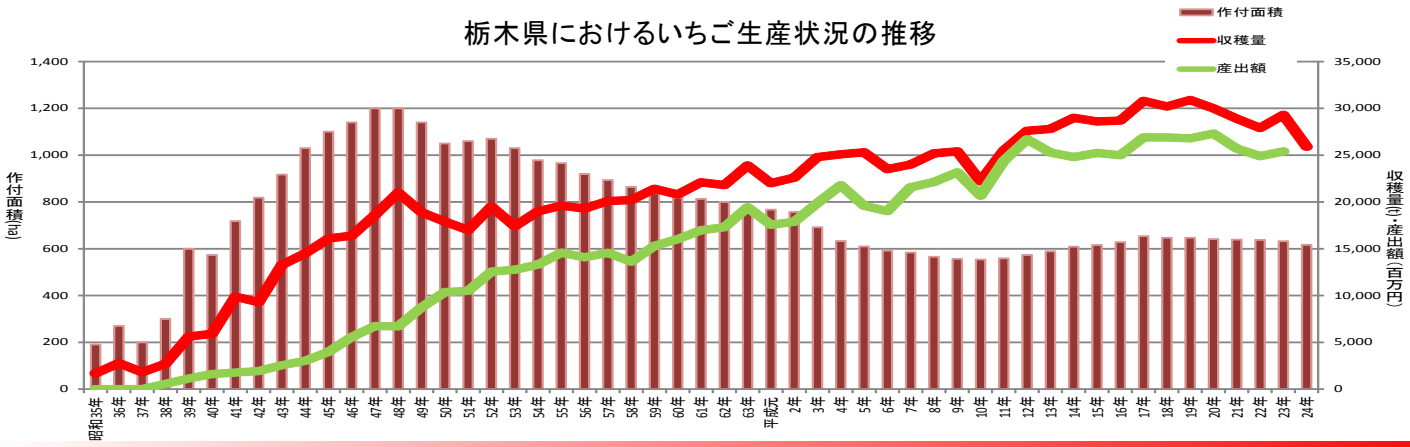
夜冷処理

『とちおとめ』誕生

平成８年、栃木県が開発した大粒で食味の良い品種「とちおとめ」が誕生しました。現在、栃木県は生産量・産出額とも全国１位を誇り、平成18年には「いちご王国とちぎ」を宣言し、全国をリードするいちご産地として関係者一丸となって努力しています。

とちおとめ

栃木県におけるいちご生産状況の推移



栃木県農業試験場 いちご研究所